

世界への挑戦

第6回：どん底からの復活 村越 真

1980年代の後半、男子チームはどん底にあえいでいた。85年87年と2回続けて、チームはリレーで最下位であったし、女子チームも87年には失格、89年には時間オーバーで失格だった。

そして90年、エリートの舞台は鹿島田らの参入で、新たな展開を迎える。

どん底からの脱出

1987年の世界選手権を境に僕の生活は大きな変化を遂げた。1988年に僕は静岡大学に職を得て、長い長い学生生活を終えた。また1989年には結婚をし、旧姓出水久子とともに静岡で暮らすことになった。オリエンテーリングも転機を迎えた。フランスの世界選手権で経験したプレッシャーは、世界選手権で決勝進出を目指す以上、乗り越えなければならない壁だった。1989年の世界選手権に向けての準備はその壁を乗り越える方法を模索することがメインテーマとなった。

社会人となって、学生の時のように時間が十分に割けない中、できる限りのエネルギーをオリエンテーリングに割き、時にはオリエンテーリングから離れることで、オリエンテーリングへのモチベーションを復活させたりもした。競技に対して醒めた目を自覚してしまった以上、自分自身、そして自分とオリエンテーリングの関係を冷静に見つめ直し、構築しなおさない限り、モチベーションの壁を乗り越えることはできない。それが結局心理的な壁を打ち破ることにもなるのだ。どんな緊張感でも、ワクワクするようなことならそれを乗り越えることができる。フランスでの心理的な失敗も、緊張や不安そのものではなく、それを乗り越える必然性を見失っていたからこそ起こったことだったのだ。

演劇のワークショップに出かけて、心身のリラクゼーションについての技法を学んだのもこの時期だった。スポーツ選手のための性格検査を受けることで自己洞察が深まったりもした。とりわけ演劇のワークショップは自分自身を見つめ直す機会を与えてくれた。



91年世界選手権リレー（チェコ）スウェーデン **舞台へ上がる** 1分でフィニッシュ

今でもよく覚えているセッションの中で、参加者15人が協力で連想的イメージを作った。中心に座った僕は、イメージの中で垂直に切り立つ壁に挑んでいた。それは心地よい挑戦だった。自分自身の動きが完全にコントロールされた感覚、そしてそり立つ壁面を登っていく達成感。

岩壁の割れ目に咲いた高山植物が美しい。時折降りかかる岩清水も心地よい。行為とは無関係なことも楽しみながら登り続けている時、ふと一瞬の不安がよぎった。僕はどこまでこの岩壁を登り続けていくのだろうか。この岩壁に終わりはあるのだろうか。

その答えは、僕に引き続いて連想を続ける人々のイメージの中にあった。彼らのイメージは、岩壁を登りきったピークからの素晴らしい眺めやその麓に広がる農村の安らぎに満ちた光景の存在を僕に教えてくれた。挑戦の果てには、常に達成感や満足感、そして安らぎがあるのだ。だからこそ、僕が世界選手権への挑戦の中で見失っていたものだった。

89年、スウェーデンの世界選手権への挑戦は、身体的には満足のいくものではなかったし、技術的にも完成からはほど遠かった。しかし、メンタルな面では得ることの多いレースとなった。

トレーニングキャンプが終わりに近づくころ、宿舎のジャグジーに入っていると、他の国の選手たちが入ってきた。隣に来たのは、85年の世界選手権で北極勢に混じって10位に入ったハイドロン・フィンケだ。僕が話し掛けたのをきっかけに、選手たちの会話の輪がジャグジー全体に広がった。それは、自分自身がこの世界選手権の舞台の一員と心から感じられる瞬間だった。



リレーのレース後、87年来の友達ニュージールランドのキャティと健闘をたたえあう。彼女は1走でトップゴール！（ ）

85年87年とリレーで最下位を続けた男子チームにも、ささやかな進歩があった。どん底から這い上がるきっかけはつかめた。90年代に才能ある役者たちがそろそろお膳立ては出来上がったのだ。

1980年代後半は勝つことに意味を見出したい、心理的には辛い10年間であった。88年に生活のパターンが変わることで、変化の兆しは現れたが、競技という面での心理的試練がなくなったのは90年代に入ってからだ。エリートシーンに鹿島田浩二がやってきたのだ。

1985年のハケ岳のトータス5日間大会で、5日間トップの完全優勝という衝撃のデビューを飾った彼は、おそらく周囲から「村越を超えるなら彼だ」と思われていたはずだ。その彼が世界選手権の代表メンバーに選ばれたのが、91年だった。

その年彼は大学を休学し、同年代の国沢中村弘太郎とともに、5月から北欧に遠征していた。7月にスウェーデンで開かれるオーリンゲン5日間大会では、H21Aながら彼は総合で8位に入るという成績を残した。やはり世界選手権のメンバーに選ばれていた中村も、好調のようだった。彼らと走れる世界選手権は僕が10年来望んでいたものだった。

その年優勝を狙っていたスウェーデンの男子チームは、1走のスペシャリストとして、マルティン・ヨハンセンを投入した。彼は最初の部分でミスをしたのか、やや出遅れていた。しかし、それも4時間近い長丁場の中では十分挽回可能な程度のミスのはずだ。しかし、100mのいき登りの後のピークの中腹にあるコントロールへのアタックで彼は再びミスをした。僕がそのコントロールを過ぎた時、彼が向こうからアタックしなおして来るところだった。僕が「こんなんでスウェーデン大丈夫か?」と思ったし、彼も「こんなところで日本人に会うなんて」とショックを受けた。彼の頭は「日本選手から離れること」でいっぱいになった。すっかりリズムを崩したかれは、再びコース後半で僕と再会することになる。その時には彼はトップと6分以上離されており、スウェーデン優勝は1走時点ですではかない夢と消えていた。彼が14位でゴールし、僕が多分15位でのゴールだった。これは2走のカッシーにつなげるには十分な順位であった。

当時スウェーデンの監督だったヨラン・アンダーソンは、今でも「レース中にはどんな予期せぬできごともありうる。それに動じない心理的な準備が重要だ」という教訓として、このレースのことを話している。またしても僕たちは物語の登場人物の一人となったのだ。

レースは個人戦の合計ではどう考えても勝てると思えないスイスが優勝した。スイス男子は95年まで3連覇であった。



10年来のライバル、鹿島田浩二。次代を担うと目される彼だが、残念ながらまだ世界選手権の予選を通過したことがない。

競い合いの時

カッシーの参入以来、エリートでのレースは僕にとって刺激的なものに変わった。カッシーはまだまだ「へなちょこ」だったが、それでもちょっと気を抜くと勝てなかった。勝とうと思うレースには十分な準備で臨むことが必要だった。消化試合のような全日本は終わり、1回1回が真剣なレースとなった。

そして、そこに天才入江崇もやってきた。彼は大学でオリエンテーリングを始めたにも関わらず、2年の終わりには4年生の鹿島田についてインカレ個人戦で2位となった。そして同じ土山のトレインで開かれた世界選手権選考会で安定した結果を残し、世界選手権代表選手に選ばれた。オリエンテーリングを始めてから、たかだか2年2月後のことであった。

この時期は、僕にとってトレーニングがもっとも充実していた時期でもあった。カッシーや入江と3000mや5000mのタイムを競いあっては、トレーニング意欲を掻き立てていた。自分を高めることが心から楽しい時期であった。当時、大学の陸上部のトレーニングに参加していた僕は、カッシーをそのトレーニングに呼んで一緒に参加したし、そうしてスピードトレーニングの必要性に目覚めた彼は、渋谷の織田フィールドで走る会を立ち上げた。日常的に互いを磨きあう場としてのクラブが、この会の誕生によって初めて成立したのだ。それ以降、京都や名古屋、八王子と、レベルの違いこそあれ、トレーニングの時間を共有しあう場は広がりつつある。90年前半こそ、日本のトップオリエンティアが真のエリートに一歩近づいた時期だったのだ。

悪夢、再び

この時期は反面、若者たちを育てる立場の自分と、レースに集中したい自分の葛藤に悩む時期でもあった。93年の10月に開かれたアメリカでの世界選手権では、その思いは極致に達した。91年のチェコでの世界選手権以来、参加国数の増加で、

個人戦(クラシック)の参加人数は1国2名に限定されていた。若い国沢と鹿島田にクラシックの出場をさせたものの、それをサポートしている自分自身に違和感を感じていた。また、充実した4人のメンバーでリレーを走る経験がなかった自分は、リレーの前夜は、彼らに十分な舞台を提供してやることのできるかどうか、極度の不安を感じていた。

リレーの当日は、どんより曇った、いつ雨が降り出してもおかしくない天気だった。いつものように1走を走った僕は、前日の不安にも関わらず好調だった。上位集団にも十分ついていくことができたし、コース中盤での中堅国との競り合いでも一歩もひけをとらなかった。緩やかな尾根の登り斜面を下って、3番の道を横切る。そこから150mほどいけば、ラストの2つ前のコントロールだ。事実上このコントロールでナビゲーションは終わる。周囲のチームの動きから見ても、トップとさほど離れていない位置を走っているようだ。沢の中にこのコントロールを見つけた時、「これで自分の役割を果たせた!」そういう安堵の気持ちに包まれたことを、今も覚えている。

後で振り返れば、その安堵感が、僕から注意力を奪った。レースはもちろんそこで終わりではなかった。自分が通過したと思った岩のコントロールは、岩がちな沢のコントロールだった。僕のコントロール不通過でチームは失格となり、3走の国沢と4走の入江が出走することは禁じられた。

そろそろ代表選手も終わりにしようかと迷い始めていた僕は、この失格で、チームが「お前はもう要らない」と言うまで選手になる努力を続けよう決心した。もちろん、そのことで失格になった責任が不問になる訳ではない。現実には僕も国沢と入江という二人の若い選手が世界選手権でリレーを走るという貴重な機会を奪ったのだし、そのことに対しては、今でも心の中に申し訳ない気持ちを抱いている。もちろん、当時僕がすべきだったことは、その失敗に打ちひしがれるのではなく、更にチームを率いて前に進むことだった。(村越 真)